

# 大塚 甲山（おおつか・こうざん）

## 1、プロフィール

俳人、詩人、歌人。「文庫」投稿者として出発。三度の上京により中央文壇を目指す。戦後の評価は「新小説」掲載の反戦詩、社会主義的詩に拠るところが大きい。

<生没>

1880(明治 13)年1月1日 ~ 1911(明治 44)年6月7日

<代表作>

稿本詩集『蛇蛻(だぜい)』など三巻

稿本俳句集『村柏』『片廂』など四巻

稿本歌集『海士(あま)の籃(かご)』『水沫(みなわ)』

<青森との関わり>

上北郡上野村(現東北町)生まれ。村役場書記、郡役所雇員を勤める。

## 2、作家解説

本名は寿助。明治 23 年上北郡上野簡易小学校卒業。同 25 年「小日本」を読み子規の俳句を知る。30 年「小文庫」に投句。31 年与謝野鉄幹の影響で「午後」なる文を書き「文庫」に投稿。32 年上京し、東海道方面にも行脚する。33 年帰郷、俳句に傾倒し、東奥日報に投稿。35 年、再度上京、江渡狄嶺、松本彦次郎らの学生塾精神窟に入る。『一茶俳句全集』を編集、出版。また出版の意図で詩稿を鉄幹に示す。36 年精神窟解散。森鷗外に近づき、秋の観潮楼歌会に出席。37 年 2 月「平民新聞」の非戦論を読み衝撃を受け 5 月社会主義協会に入る。7 月坪内逍遙の紹介により、後藤宙外の「新小説」に反戦詩「今はの写し糸」などを発表（以後翌年まで投稿十数回）。この年日露戦争のため渡満中の鷗外が、詩集出版を想定した二首の歌を贈る。

38 年帰郷。社会主義者西川光次郎に出した、「新小説」からの稿料皆無を記す手紙が、宙外に知られ、激怒を受け発表の途を断たれる。39 年浦野館村役場書記を経て、郡役所雇員となる。43 年在郷中東奥日報への寄稿多く鳴海要吉・和田山蘭らを知る。鷗外に依頼した歌集出版の件は断られる。就職の依頼は日露戦役衛生史編纂事務所の雇員ということでかなえられ、三度目の上京。しかし翌 44 年 1 月 24 日吐血。この日は大逆事件被告人 11 人の死刑執行の日であった。2 月 21 日、堺枯川の開いた社会主義者の会合に出席。肋膜炎のため 5 月 6 日帰郷、6 月 7 日死去。

### 3、資料紹介

○『大塚甲山遺稿集』

図書

1957(昭和 32)年 10 月 30 日

210mm × 155mm

甲山の文学的業績を顕彰するため、米内山義一郎が代表となり、小山内時雄、戸館宰、川崎陸奥男、藤井正次の 4 人が編集。7 巻を刊行する予定であったが、詩集上・下の 2 巻で中絶した。稿本詩集『蛇蛻集』を中心に二百数十篇の詩を収める。